

短報：

石灰硫黄合剤による化学熱傷

—— 障害の防止を求めて ——

永美大志*, 大谷津恭之^{2*}, 加藤絹枝*, 前島文夫*,
西垣良夫*, 夏川周介*

石灰硫黄合剤は、春先に果樹の殺虫、殺菌に使用される農薬である。製剤は、強アルカリであり、しばしば難治性のアルカリ腐食を本態とする深達性の潰瘍を引き起こす。

我々も2007年に50代男性の症例を経験した。患者は、3月上旬、防水性の防護具を着用せず庭木に本剤を散布し、ズボンなどへの付着にかまわず、そのまま作業を続行した。夕方より皮膚付着部の疼痛が惹起し、翌朝になっても継続したため受診した。初診時、両下腿後面に白色潰瘍を伴う3度の熱傷を認めた。第6病日デブリードマン術を施行したが、潰瘍は真皮層から脂肪層に及んでいた。人工真皮で被覆して肉芽形成を促した後、第20病日に植皮術を施行した。経過は順調で、約1か月で退院となった。

わが国において2000年代に入ってからほぼ毎年、本剤による化学熱傷の症例が報告されており、他の研究報告を見ても、この熱傷の発生数がなかなか減少していないことが伺われた。

この熱傷を防止するには、①防水性の防護具で全身を覆うようにすること、②万一本剤が身体に付着した場合は、迅速に洗浄すること、の2点が肝要である。障害防止のためのさらなる啓発活動が必要と考え、啓発パンフレットを作成した。

①石灰硫黄合剤 ②化学熱傷 ③アルカリ腐食 ④障害防止

はじめに

農薬は、第二次大戦後に使用量が増え、農作物の増産、労働負担の軽減に貢献してきた。一方、農薬の使用は、生物に対して毒性のある化合物を、農耕地、生活空間などで開放的に使用する事を意味し、ヒトを含む生物および環境へ悪影響を及ぼす危険性を併せ持つ。

石灰硫黄合剤は、春先に果樹の殺虫、殺菌に使用される農薬である。製剤は、強アルカリで

あり、しばしば難治性のアルカリ腐食を本態とする深達性の潰瘍を引き起こす¹⁾。2000年以降でも、症例報告が散見され、障害の発生が、なかなか減っていないものと推察される。我々も重症化してデブリードマンおよび植皮術の施行を必要とした症例を経験したので、その経過を報告し、本剤について考察する。

方 法

症例は、佐久総合病院形成外科で、2007年3月に経験された。

日本における学術報告数は、科学技術振興機構が運営する医学論文データベース JMED Plus を利用し、「石灰硫黄合剤」をキーワード

* 〒384-0301 長野県佐久市臼田197

佐久総合病院健康管理部

^{2*} 同 形成外科

(受付：2009年12月21日)